薬学部の立場から　－チーム医療は大学教育から－

昭和大薬・加藤　裕久

がんチーム医療に期待される病院薬剤師の役割は、がん薬物療法の最適化、薬物療法の安全確保、薬学的臨床研究の推進といえる。具体的には入院・外来患者への薬剤管理指導、抗がん剤の混合調製、適切ながん薬物療法の提案、レジメン管理、エビデンスの構築などがあげられる。特にがん専門薬剤師やがん薬物療法認定薬剤師は、積極的にがん薬物療法の最適化の推進とその安全確保の向上、レジメンの作成とその標準化、薬学的臨床研究の推進と導入そして薬剤師ならびに医療スタッフらへの教育と研修に積極的に寄与しなければならない。一方、保険薬局でも効果および毒性の強い経口抗がん剤を応需する機会が増え在宅医療を担うことから、薬局薬剤師は適切ながん薬物療法の提言とその安全確保に努め、積極的に薬学的臨床研究に取り組むことも期待されている。

このような専門性を高める前提となるのは、薬剤師としての基礎能力である。つまり、がん領域だけでなく、他の領域についても薬学的知識の造詣を深めなければ、がんチーム医療には貢献できない。がん患者はがん性疼痛を含む多彩な随伴症状を伴い、それに対処し指導的立場を担わなければならないからである。

がん医療を担う専門性の高い薬剤師を養成するためには、大学においてはコミュニケーション能力の定着、病態や薬物療法などの専門知識の修得、薬学的臨床研究の推進、学会発表や論文作成能力の開発が必要である。そして、大学卒業後の医療現場では、より実践的なコミュニケーション能力の修得、専門知識の蓄積と提供、医薬品の副作用モニタリングと回避方法の提案そして研究テーマの発掘と研究ならびに論文作成が、大学での薬学教育の延長線上として定着することが望ましい。

薬学的臨床研究を推進するためには、大学薬学部の環境整備も重要である。そのためには、研究室横断的な研究、つまり基礎系研究室と臨床系研究室の連携を高め、それぞれの特徴を相乗化する必要がある。

また、チーム医療を定着させるためには、特に医学部や看護学部などを有する医療系大学においては、教育と研究の両面で学部間の連携を再活性化する必要がある。そのことにより、大学での教育が将来のチーム医療を醸成することになる。

今後の薬剤師教育は、大学から医療現場まで、専門性を高めようとする薬剤師を継続的に教育し、支援を強化すべきであり、医療現場と大学との緊密な連携がさらに重要になると考える。